罪 ～No.2045～

塩冷　津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
罪　～Ｎｏ．２０４５～

【Ｎコード】
Ｎ１０１７Ｍ

【作者名】
塩冷　津

【あらすじ】
この世界は、すべての国が一つに統一された時の話。
しかし、あまりに無理やりな方法で統一されたために、地区間での争いが絶えない。勿論、犯罪も・・・。
そんな中、裏ではある実験を行っていた。だが失敗。その時に生まれてしまった者達は牢獄へと入れられる。
Ｎｏ．２０４５もそのうちの一人。彼女には外という世界が分からない。それほど牢獄に入れられていた。
Ｎｏ．２０４５はある日、東と出会う。東は彼女に告白をする。彼

からの告白は受け止められ。一つのカップルができる。
そう、その話が5年前の話。その後、いろいろゴタゴタがあり、Ｎｏ．２０４５は晴れて地上に立つ。
そして、彼、東とまたしても出会い、幸せの日々を過ごすはずだった。
・・・まさか――――――になろうとは・・・。
・・・その後、東とＮｏ．２０４５は長いようで短い逃亡生活を送る。

The before 5 years ― ?（前書き）

この小説の作成者はへたれ野郎です。
そんなへたれ野郎の小説を見てやってもいいぞ！という勇敢な方々がいるなら、この小説をお読みください。
へたれすぎてがっかりしないでください。

The before 5 years ―？

ここは…何処？私は…誰？……いや、私自身で分かってるんじゃないの。
重い体をムクリと起こした。
そして、ベッドの端から足を下した。足の裏にネトリという感覚がする。
この感覚は毎日…いや、毎朝…どっちでもいいや。毎日する。最初は慣れなかったけど、今はもう慣れた。気にさえかけてない時もある。
そう、目の前に広がる光景も…。

……血。

目の前に広がるいたる所に血の紅で埋め尽くされていた。なんで？どうして？毎朝自問する。だけど、答えは出ない。
今日も答えが出ない。まぁ、いつものことだけど…。
私はしばらくベッドに座ったまんまでいた。
下にはいろいろ落ちているけど、気にしないでおく。
すると、私の『部屋』に一人の足音が近づいてくる。誰だろう？
そう思ったが、答えはすぐに分かった。……『いつものおじさん』だ。
「また殺ったのか。トモダチとは仲良くしろよ。って言ったのになぁ～。なぁ？」
トモダチ…。あれか、あの落ちているものか。
私は無言のままでいる。声を出したくない。ただそれだけの理由。
「……とりあえず出ろ、面談だ。」

無言でいる私に口をへの字にしてからそう言った。
誰だろう…面談なんて。私自身、面談なんてしたことがなかった。この数年間一度もしたことがない。
おじさんは腰に付いていた鍵で『扉』を開ける。
私はおじさんの前まで行く。すると、私の手を縄で縛りだした。
「俺も、こんなものをこんな娘には付けたくないんだけど、仕方ないんだ。我慢してくれ。」
大丈夫、私は全然キニシテナイ。そう私は思いながら、素直に縛られた。
そして、おじさんは私に縛った縄を引っ張って先導していく。
『部屋』から出た廊下には同じような『部屋』がたくさん並んでいた。
『部屋』という『部屋』からはいろいろ声が聞こえる。
呻き声、泣き声、奇声といったさまざま。
一歩一歩歩いているたんびにその声が耳に入って頭がもやもやしだす。
いやぁっ！『みんな』！そんな声を出さないでぇっ！
しばらく歩いていると、一つの部屋の前でおじさんは立ち止った。つられて私も立ち止る。
「面談室だ、ゆっくり面談してくるといい」
おじさんはそういうと、手の縄を外してくれた。
そして、私はその扉の中に入った。
部屋は、半分に仕切るような透明のプラスチックの板があり、こっち側と向こう側のそれぞれに椅子が置いてあった。
まさしく「面談室」だった。
私はこっち側にある椅子に座った。
すると、向こう側にある扉が開いた。
そこから入ってきたのは、私と同じぐらいの年の男の子2人組みだった。
何故こんな子供たちが…？

その2人組の一人が私の前に座った。
「…」
私は何を聞かれようと、何言われようと、無言でいるつもりだった。
すると、もう一人の男の子が我慢の限界なのか、座っていた男の子に怒鳴りつける。
「ほら！早く言えよ！俺の親父経由で合わせてやったんだからとっとと言えよ！」
座っていた男の子はその言葉に対して反論を述べる。
「無理だよ！実際に見てみると言えないよ！」
言う？言えない？何のことかさっぱりだった。
無言でいるつもりでいたけど、長引きそうなのでこっちから問いかけてみることにする。
「あの。私に何か用ですか？」
「あぁあっ！もう！ほら！聞いてきたぞ！お前が答えろ！」
立っていた男の子は座っている男の子にもう一度怒鳴りつける。
「わかった！言うよ！言うから！」
怒鳴りつけられた男の子は、今から言うぞという顔を作り、こっちを見つめてくる。
「で、要件は何ですか？」
私は仕切り直しの意味を込めて言ってみた。
「ぼ、ぼぼ、僕と、けけけけっ、けっ、けけけ……」
「はっきり言え！」
「はいぃっ！ぼ、僕と、結婚してくださいぃっ！！！！！」
…はい？結婚？なんでまた、まだ１０歳ぐらいなのに。なんで？
座っていた男の子はすごく顔を赤く染めていた。ということは、とても本気なのだろう。
いろいろどぎまぎすることがあるけど、ひとつ聞いておきたいことがある。
「なんで、私なんかを…？」

「僕は、君を一目見て好きになってしまいました！なので、結婚を前提にしたお付き合いをしてください！」
理解できた。結婚してほしい＝それを前提にして付き合ってください。ということなのだろう。
しかし、何故か、この男の子の言うことを否定できない。いいえとは言えない。むしろ、はいと言ってしまいそう。
「…はい…。」
私がそう思っている間につい答えてしまった。いや、これが私の本音なのだろう。今さらながら、私自身の顔が熱くなっていることが分かるのだから。
すると、男の子二人は、目を丸くしていた。そして、思いっきり
「やっっっったぁぁぁぁあああぁぁあ！！！！！」
と叫んだ。
その後は、告白してきた男の子の名前とか、住所とかを教えてもらった。

……そう、これが5年前の記憶。

私は、ポケットから一切れの紙を取り出した。
そこには、誰かの個人情報が書いている。
そう、私が『あの場所』に居た時に好きになった男。
そして、彼もまた、私を好きになってしまった。
私は、紙切れをポケットに直し、漆黒に染まった夜空を見上げる。
「今から会いに行くね。……東（アズマ）……」

The before 5 years ― ?（後書き）

塩冷（しおざめ）　津（つー）です。
この「小説家になろう」というところで書くのは初めてです。
だって、今まではブログで（ｒｙ
ということで、ここにあげる小説はブログでもあげているものです。
まぁ、へたれ小説をどんな方々に見てもらってもへたれなんですけどね★
あと、所々関西弁が含まれてると思います。あまり気にしないでください。地元が兵庫なんで・・・。
とりあえず、この話だけは完結していきたいと思います。
これからもよろしくお願いします。

The 1 day ― ?（前書き）

へたれ文章を見たくない方は早めに帰った方がいいですよ！いや、ホントに！

The 1 day ―？

ここは、何処だろ・・・。・・・そうだ、私は野宿をして・・・。
私は体を起こす。１１月の風は冷たく、体に凍みる。これから冬を迎えようとしていることがよく分かる。
体中が痛い。ベンチなんかで寝るんじゃなかった。しかも、少女一人がこんな公園のベンチで寝てるなんて、襲われなかっただけ運が良かったっていうか、なんていうか・・・。
私はそのまま地面に立ちあがる。周りを見渡してから空を見上げる。
まだ少し暗い。何時だろう。公園だから時計があるはず・・・。
時計はすぐ隣にあった。短針は６の数字を示していた。
早いけど、もう行こう。

そう、私は好きな人に会いに行く。

いつか約束した、あの約束を果たすために。

まだ、少し朝靄の立ち込める中を歩いて行った。

＊

何処だろ・・・。
私は彼から貰った紙を見ながら彼の家を探す。全く外とは決別していた私にとっては、住所などというものはまだ習ってもいない数

学の問題を解くようなもの、習ってもいない漢字を読むようなもの。とにかく分からない。
人に聞く？駄目、今の私の立場で人と話すなんて自殺行為。ただでさえ、普通の住宅街の中を歩いているだけでも危ないのに。自力で探すしかない。
私はしばらく住宅街の道を歩いた。

すると、目の前に十字路が見えてきた。
・・・まさかね。十字路の死角からぶつかってきた人が彼だったなんて、そんな偶然ある訳無い。
私がそう自分で決めつけていながら十字路に差し掛かった時。
「わぁぁぁぁぁ！！。遅刻だ遅刻ぅぅぅぅぅぅ！！！！」
「えっ？」
刹那、横から私の体に衝撃が走る。
「キャッ！？」
「のわっ！？」
私諸共、相手も声を上げ、転倒する。

「・・・い、いったぁ・・・」
私がそう呟きながら体を起こしていると、私の前に一つの影ができる。
「だ、大丈夫か？」
ぶつかってきた相手が手を差し出し乍言っている。
私はその手に手を乗せ、「大丈夫」と言おうとした。
「だ、だいじょう・・・ぶ・・・・・・・え？」
言葉を失った。
黒色の清爽な髪、茶色の瞳、５年前とあまり変わらない端整な顔。
どう見ても、相手は・・・。

・・・彼、そう、東だったから。

前言撤回。偶然はある。だって、目の前には東がいるから。
だけど、私の驚きとは反し、彼は「どうした？」という顔を見せる。
東・・・私だよ・・・思い出せない・・・？
私はそう言いたかったが言えない。甘酸っぱい気持ちがとぐろ巻く。
「あ、あの・・・」
私が思いを伝えようと言いかけた時。
「あっ！！忘れてた！！！朝練に遅れる！！！！」
彼の言葉によって掻き消される。そして、私の手を解き、私を置いていこうとする。
え・・・東・・・？
東が私から離れていく。一歩一歩・・・さらに一歩。
・・・嫌、東・・・私を忘れたの・・・？声を掛けなきゃ。・・・声を・・・。
「・・・ま、待って！東っ！！」
私がそう言うと、彼が立ち止ってこっちに振り向く。その顔はとても迷惑そうな顔で、心に突き刺さる。
でも、言わないと。思いを！
私はその場に立ちあがり、彼に向って言葉をぶつけた。
「覚えてない？私、私だよ！」
しかし、彼の返答はとても冷たく、虚しいものだった。
「・・・？誰だ？」
「えっ？」

覚えていない・・・？東が私のことを・・・？・・・・でも、忘れ去られるのは嫌っ！あの日の約束をっ！
「覚えてないの！？私を！！」
私は必死に訴えた。このまま忘れ去られ、私の生きてきた意味が無くなるのが嫌だったから。

「・・・・・・あ・・・・・・・」

彼は眼を見開いた。まるで思い出したかのように。
「お、お前は・・・」
この言葉によって、私の顔が少し綻ぶ。
「お、思い出した・・・？」
「あ、ああ。お前は、５年前の・・・」
もう、この言葉で十分だった、私の目から涙を溢れさせるには。
この涙は痛み、苦労の涙ではない。嬉しい、感激の涙だった。
良かった・・・・・・。覚えていてくれた。彼が、東が・・・。
「わ、私、会いたかったんだよ・・・。東、私・・・」
「お前・・・。ごめんな、なかなか思い出せなくて・・・」
「いいよ、キニシテナイし・・・。だって、思い出してくれたんだもの・・・」
５年という歳月を要するにはその分の代償が必要。記憶もその中の一つ。東は悪くない。会えるまでが永過ぎたのだ。
彼は、少し微笑み、私の頭を撫でた。その行動に温かさを感じた。人との係わり、そういうものの温かさを。
「ごめんな、そういえば、名前を聞いてなかったな。名前は？」
名前。私はもっともその言葉を忌み嫌う。だって、私には名前がない。『Ｎｏ．２０４５』という肩書きだけしかないから。
だからと言って、彼に嘘は付けない。私は正直に言った。

「名前・・・無いの・・・」
「え？」
彼が聞き返してきた。無理もない、名前を聞いて「名前がない」と言われたら普通なら聞き返す。だけど、私には本当の名前はない。彼に念押しをしてみる。
「本当に無いの・・・」
「本当に？」
「うん」
彼は困ったような顔をして、辺りを見渡す。
あ、東を困らせてしまった。嘘でも名前を言うべきだった。私は少し後悔。
「昔の名前とかは？」
「昔？」
「いや、昔まで名前はあったのに、それを忘れてしまったとかさ」
私はその言葉に首を振る。
確かに、東の言うとおり、昔には名前があったのかもしれない。でも、そんなの今更覚えているはずがない。
私が少し考えていると、彼は何かを思いついたらしい。何か閃いたような顔をして私を見る。
「お前は、今度から『椿（つばき）』だ。よろしくな」
「椿・・・いい名前。ありがとう」
椿。彼から貰った初めてでさいこうのプレゼント。ありがとう・・・東。

・・・と、最高のムードの中で、彼が腕につけていた時計を見て声を上げる。
「あ！朝練だぁあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「えっ？」
私はそういう反応しかできなかった。
彼はそのままがっくりと肩を落とす。

・・・時間、少し考えよ？近所迷惑になるよ？
と言いたかったが、彼の様子からして言えるはずもなかった。
「もういいや、今日は学校を休むとするか。椿とも会えたし」
彼はケロッと開き直り、私の方を見る。
「そういえば、そんな服で人前になんか出られないだろ？」
「え？服？」
私は自分の服を見た、確かに、所々がぼろぼろで穴空きまくり、人前に出られるようなものではなかった。というか、人前には出たらいけないけど。
彼は私の服をまじまじと見ている。すると、彼は何かに気づいたような顔をする。
「一つ質問していいか？」
「ん？」
質問？何だろ。
「下着履いているか？」
「・・・？下着・・・？」
下着？何それ。
私は真顔でそう答えた。すると、彼は顔がどんどん赤くなっていく。
「い、いや、別にいいんだ。気にしなくていい」
そう笑いながら言うと、本題の方に戻す。
「今日は、椿の服とかを買いに行くか」
彼は笑顔を私に向けながら言う。
「うん」
私は笑顔でそう答える。やっぱり私と正反対のようだ。明るいし、よく喋る。私と彼とでは天と地の差がある。と、そんな気がした。
「そういえばさ」
彼は突然、そう話題を起こす。
「家はあるのか？」
そう聞いてきた。しかし、家自体無い私にとっては無駄な質問。

正直に答えた。
「・・・無いけど？」
彼は私の質問に顔をしかめる。そして、また考え出した。
「東・・・？」
私は突然の彼の沈黙に声をかけた。すると、彼は何かを思いついたように「あ」と声を出す。
「俺の家に来いよ」
「え？家・・・？私を入れていいの・・・？」
一つの質問を彼にした。彼は私の質問に答える。
「別にいいよ。親にはテキトーな言い訳を言っとくから」
笑いながらそう言うと、私の手を引いて歩いて行く。
「とにかくだ、俺の家に来い」
彼は私に笑顔でそう言いながら歩いて行く。私はそんな彼に一言で同意する。
「・・・わかった」

The 1 day ― ?（後書き）

これからは、このあとがきを使って、キャラクターでの会話をしていきたいと思います。

椿（No．２０４５）「やっと会えた」
東（守澤　東）「ごめんな、気付いてやれなくて」
椿「いや、いいよ。だって、５年も経ってるんだから」
東「そういや、あれから5年も経ってたんだっけ？そんなに経ったっけ？」
椿「うん、経ってるよ」
東「そうかぁ。５年もか・・・。」
椿「何を思い返してるの？」
東「いや、５年前の椿。こうやって比べると、大人っぽくなったなぁ」
椿「えっ？そう？」
東「だって、この（ry」
黒椿「・・・なんだって？」
東「へ・・・？椿さん・・・？」
黒椿「フフフフフ・・・」
東「ちょっ！怖いよ！ってか、なんか持ちだした！だ、だれかぁぁぁ！！！」

この後、東は椿さんに扱かれました。
ちなみに、ここの東や椿さんは、作中の東や椿さんとは少し性格が異なります。悪しからず・・・。

The 1 day ― ?（前書き）

明日テストなのに更新していていいのだろうか。

と思ったこのころ。

The 1 day ―?

しばらく、彼の後ろを付いていくと、一軒の家の前で立ち止まった。どうやらこの家が彼の家らしい。
「ちょっと待ってろ」
彼はそう言うと、扉に耳を当てる。そして、こっちを振り向いた。
「親がいる」
「・・・え？」
親がいる。となると、彼にとってまずいことでもあるのだろうか。私はわからないため、彼に聞くことにする。
「それって、どういうこと？」
「俺のとこの親はウザいんだよ。女友達を連れ入るたんびに、この子って彼女？って聞いてくるんだよ」
ということは、彼は私を連れ入るところを親に見られたくないとなる。
「どうするの？」
彼に問いかけてみる。すると、彼は開き直って答えた。
「でもさ、実質俺たち付き合っているわけだし、別にいいか」
「・・・私の服はどうするの？」
率直に質問した。私の服はとてもぼろぼろで、人に見せられないような状態だからだ。
「ちょっと待て」
彼は鞄を地面に置き、開いて中から何かを取り出した。服のようだ。
「とりあえず、これを着ていろ」
「う、うん」
彼から服を受け取った。私はその服を一旦地面に置き、それを着るために今着ている服を脱いだ。
すると、彼が私を見た瞬間、顔を紅潮させ、私に背を向けた。

「あ、東？」
「は、早く着替えろ！くそっ、・・・ブツブツ」
最後の方の言葉が聞こえにくく、聞き取れなかった。問いかけようかと思ったが、とりあえず、地面に置いた服を着る。
「着たよ」
彼は私の言葉を聞いて私の方に振り向く。
「お、まだ似合ってるじゃん」
「ありがと」
私は、その言葉が嬉しく、彼に微笑んだ。そして、地面に落ちてある服を拾おうとしたら、彼が問いかけてきた。
「そういえば、その服の中って、裸・・・か？」
その言葉に私は頷く。彼は私の頷きを見るなり、また顔を紅潮させ、クラクラしだす。
「だ、大丈夫！？」
思わず声をかけたが、私のせいであることは明白。とりあえず謝っておくことにする。
「ご、ごめん」
「だ、大丈夫だ。と、ととりあえず、中に入ろうか」
「う、うん・・・」
少しどぎまぎしたが、彼の言う通り、家に入ることにした。
彼は、鍵をゆっくり鍵穴に差し込み、ゆっくり回す。

・・・ガチャリ・・・。

開いた。そして、ゆっくりドアを開けた。
すると、開けた矢先、目の前には彼の母らしい人物が立っていた。
手には花瓶、手入れをしていたのだろう。
「ん？東どうしたの？忘れ物？」

「いや、ちょっと別の用事で。彼女を連れてきた」
彼は、彼女を必死に対処しようとしていることが分かる。しかし、彼女はしつこく、なかなかその場から離れない。
「あらそう？彼女を連れてきたのね。今日学校は？」
「休む」
彼の顔は苦笑いの状態で固まっていた。相当いけない状況なのだろう。
「わかった。今日は家族会議ね」
「えぇっ！？なんで！？」
彼の表情が驚きのものになる。
「だってそうでしょ？女の子と遊ぶために学校を休むなんて、『普通』じゃありえないもの」
「だからってぇ・・・」
「もう決めちゃったんだもん」
彼女はそう言うと、奥の方に歩いて行った。彼は彼女が奥に消えるのを見送ってから肩を落とす。
私はそんな彼を励ます為、声をかける。
「あ、東、大丈夫だよ。家族会議なんて・・・・・・東・・・？」
言葉が詰まったのは彼が何かを呟いているからだ。私は耳を傾ける。
「・・・ブツブツ、される・・・。」
「・・・えっ？」
あまり聞こえなかったため、私は彼に聞き返す。すると、彼は顔を上げて私の方を見ながら言った。
「お、親父に殺される・・・」
私はそんな彼の頭を撫でてみた。彼が少しだけ小さく見える。彼は撫でられている手を退けて言う。
「とりあえず、中に入ろう」
「う、うん」
東はそう言うと、中に入って行った。私もつられて中に入って行

った。

The 1 day ― ?（後書き）

椿「さてと、作者がテスト前なのに更新していますよ～」
東「たぶん、テストはアウトでしょう」
椿「と言いつつ、始まりました『★A★T O★G A★K I★』。でも、さっそくネタがないという事実。作者も困っております～」
東「それ言って大丈夫なのか・・・？」
椿「大丈夫★作者は裏話なんて万歳！とか言ってたし」
東「・・・（言葉が出ない）」
椿「で、今回は自己紹介という形になりました。」
東「へぇ～たった二人なのにねぇ～」
椿「それは言ってはいけない。駄目、絶対」
東「はいはい、で、どっちから？」
椿「私から言うね～」
東「おう」
椿「私の名前は『N o．2 0 4 5』です。今は、東から貰った『椿』っていう名前があるんだけど。一応言っとかないと。好きなものは、東に海、ハンバーガーで、嫌いなものは、・・・ナメクジ・・・」
東「あれ？椿ってナメクジ嫌いだっけ？」
椿「あれはだめ、絶対にダメ。見かけただけでも鳥肌が立つ」
東　ポイ（ナメクジを椿に投げる）
　ピトッ・・・（椿にナメクジが張り付く音）
椿「えっ・・・？・・・・・・・い、いやああぁぁぁぁあああぁあぁぁぁ!？」
東「とまぁ、こんな感じであとがきは終了します。次は俺の自己紹介です」
椿「だ、だれかぁぁぁあぁぁぁあぁあぁぁあぁあああぁあぁ」

The 1 day ― ?（前書き）

明日、苦手な英語のテストなのに何してんだ?俺・・・。

The 1 day ―？

私はしばらく彼の部屋で待つことになった。一方彼の方は、親に呼ばれて下に行っている。

大丈夫かな・・・？

少し彼が心配だった。さっきの様子だと、親に何言われているかわかったようなものじゃなかったから。彼が部屋から出る時も、肩を落としていたし・・・。

―――――

「東・・・？」

「大丈夫だ。心配しなくていいよ」

彼は顔は笑っているが心が笑っていない。

「だけど・・・」

私が言おうとした時、下から声がする。

「東ぁ、降りてらっしゃい」

彼の母親の声だ。さっき1回聞いたので覚えている。

「呼ばれてるから行くわ」

彼はそう言うと、立ちあがる。

「東・・・」

「大丈夫だ。すぐ戻る」

「う、うん」

私は頷いた。私のそれを見て、彼は微笑み返しそのまま部屋を出て行った。この部屋には私だけが残った。

「東・・・」

―――――

「大丈夫かな・・・」

そう一人で呟きながら、床に寝ころんだ。

敷いてあった布がとても心地よく、温かい。私はだんだんと睡魔に襲われてきた。

・・・眠たい・・・。
欠伸(あくび)をしながら伸びをして、そのまま寝てしまった。

＊

ここは・・・？
私が体を起こした場所はいつもの風景。暗く、冷たい、生ぬるい何かが落ちている。そんな風景。
あ・・・れ・・・？私は・・・東と・・・？
現状把握に時間がかかる。違う、あれは夢なんかじゃないと自分でそう断言する。
すると、目の前に一人の少女が姿を現す。突然のことだったので、何処から入ってきたのかはわからない。
「あ、あなたは・・・？」
私の第一一声。私の言葉に彼女は微笑む。その微笑みはどこかしら彼に似ていた。そして、口を開ける。
「それはおいおい理解すると思うわ」
彼女の答え。私はその言葉に首を傾げる。
それを見た彼女は、小さく笑う。
「まぁいいわ。でもね、この先から気を付けなさい。」
その言葉に私は質問する。
「えっ？それってどういうこと・・・？」
彼女は生ぬるい液の上を音を立てて私に近寄り、私のあごに手を当てる。
私は彼女の行動に少し警戒する。
「へぇ、あの子が選んだ子・・・ねぇ。いいわ、まともな子で・・・」
何を言っているのかがさっぱりだった。あのこ？誰を指すのかが分からない。
彼女は当てていた手を戻す。
「あなたは何者・・・？というか、あの子って？」
「まだ、理解はしなくていいわ。だって、あなたは回答者だもの。」

「えっ・・・・？」
その時、私が質問しようとした矢先に、視界が真っ暗になる。
＊
ん・・・・。
私は意識を取り戻す。
今の夢は何だったのだろう・・・・。私はそう思いながら寝返りを打つ。
そして、目を開ける。

・・・・！？

寝返りを打った瞬間、視界に入ったのは、彼の体。つまり、彼の体を枕にして寝ていたのだ。位置的には彼の下腹部らへんだった。
彼も、私の頭を乗せながら寝息を立てている。
すると、彼も目を覚ましたようだ。ゆっくりと体を起こす。
私も彼と同じく体を起こす。
「あ、起こしたか？」
「い、いや、起きていたから」
彼が突然そう聞いてきたので、私はすぐ答える。そして、何気なく時計を見る。
時計は１１時を示していた。そろそろ昼ごろだとわかる。昼ごろだとわかると、お腹が減ってきた。
「・・・・ぐぅぅぅぅぅ・・・・」
「・・・・え？」
「・・・・・・・え？・・・・」
私は自分のお腹が鳴ったことに驚きが隠せないまま、彼を見る。
彼も私を見ていて、実質、顔を見合わせる形になった。
そして、

「・・・・・・ふっあはははははは・・・」
「・・・・・・あはっあはははははは・・・」
・・・二人して笑った。
私自身、笑ったのは初めてと言っていいほど久々だった。今までは、笑いたくても笑えず、心が渇いていた。だけど、彼はこの渇き切った心を潤してくれる。そう私は確信した。
「何か食べに行くか？」
「うん」
私は笑顔のまま答えた。
「ついでに服も買いに行くか」
彼は立ちあがって、私を見下ろしながら言った。彼の言葉に続いて、私も立ちあがった。
「うん。行こう」
彼は私の言葉を聞いた後、一枚のカードを取って、私の手を引いて、玄関まで連れていく。
そして、外に出た。

The 1 day ― ?（後書き）

椿「さて、お気の毒に、作者のテストは2日目にして砕け散ったそうです」
東「そりゃあ、前日まで更新してたらなぁ・・・」
椿「と言いつつ、始まりました『★A★TO★GA★KI★』。・・・・・・ってか、あ～ずぅ～まぁ～？」
東「は、はいっ！？」
椿「前回ではよぉ～くもぉ～やってくれたねぇ」
東「・・・（ヤヴァい！こ・ろ・さ・れ・る！）」
椿「覚悟ぉ！！！！！」
東「ひぃぃぃぃっ！！！！！」
？「やめなさい。椿」
椿「・・・？誰？」
東「椿の知り合い？」
椿「いや、私は知らない・・・」
？「言ったでしょ、おいおい分かるって。それよりも、東、自己紹介は？」
東「あ！そうだった。じゃあ、させてもらうなぁ」
椿「うん」
東「俺の名前は『守澤（もりさわ） 東（あずま）』です。好きなものは・・・わかりません！」
椿&？「えぇっ！？」
東「だって、わからんものはわからんでしょ。あと、嫌いなのは、怒った椿さん」
椿「・・・あぁ～ずぅ～まぁ～？」
東「・・・（汗」
？「この後書きが終わってからならやっていいわよ」
椿「了解」

東「・・・へ・・・？」

？「ということで、今回も終了させていただくわ。・・・椿、ＧＯ！」

黒椿「ふふふふ・・・東、覚悟なさい」

東「ちょっ！？椿さん！あれは冗談で・・・」

黒椿「問答無用！」

東「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁあぁぁあああぁあぁぁ」

（この後、誰も東を見た者はいない）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1017m/

罪 〜No.2045〜

2010年10月11日00時14分発行